

## 『中の根本の言葉を章とした智慧（根本中論）』

梵語にて、パルギャーナマムーラマダヤーマカカーリカ。  
 藏語にて、『中の根本の言葉を章とした智慧（根本中論）』という。  
 若き文殊へ礼拝奉る。

その方が、  
 滅無く、生無く、  
 断無く、常無く、  
 来無く、去無く、  
 別義ではなく、一義ではない、  
 戲論がまさしく熄滅し、寂静である縁起生を示された。  
 完全なる仏陀であり、諸々の説者の（中でも）聖なる方である、  
 その方へ礼拝奉る。（帰敬偈）

## （第一章）

自らよりではない。他よりではない。  
 双方よりではない。無因ではない。  
 何らかの事物が、何処においても、  
 生じるとは、何時にも有るのではない。 1

縁は四相あり、因縁と、  
 所縁と等無間  
 増上もその如くであり、  
 第五の縁は有ではない。 2

諸事物の本性とは、  
 縁等に有るのではない。  
 我の事物が有るのでなければ、  
 他の事物は有るのではない。 3

縁を具える行為は無い。  
 縁を具えぬ行為は無い。  
 行為を具えぬものは縁ではない。  
 行為を具える、あるいは。 4

行為は縁を具えるのではない。  
 縁を具えぬ行為は無い。  
 行為を具えぬものは縁ではない。  
 行為を具えるか、あるいは。(仏)

これらに依拠して生じるので、  
 それ故にこれらは縁であると言う。  
 生じていない限り、  
 これらは縁ではない。如何そうではないのか。 5

無あるいは有の意味においても、  
 縁とは適したものではなく、  
 無ければ何の縁となろうか。  
 有るならば縁が何をしようか。 6

無あるいは有の意味においても、  
 縁とは適したものではない。  
 無ければ何の縁となろうか。  
 有るならば縁が何をしようか。(仏)

法（現象）は有と、  
 無と有無が成立しない時、  
 如何様に成させるものを因といおうか。  
 そのようであれば正理ではない。 7

ある時、法（現象）は有と、  
 無と有無が成立しないので、  
 如何様に成させるものを因といおうか。  
 そのようであれば正理ではない。(仏)

この有る法は所縁が、  
 無いのみであると近しく示された。  
 如何に、その法は対象とすることが無ければ、  
 所縁が有ると何処でなろうか。 8

(そう)である法は所縁が、  
 無いのみであると近しく示された。  
 そのように、その法は対象とすることが無ければ、  
 所縁が有ると何処でなろうか。(仏)

諸法が生じたのでなければ、  
 滅は合理にはならない。  
 それ故に等無間は正理ではない。  
 滅したならば、縁も何ものであろうか。 9

本性が無い諸事物の  
 有は有るのではない故に、  
 これが有るのでこれが起こる、  
 というこれは合理ではない。 10

諸縁のそれぞれと集合に、  
 その果はまさしく無い。  
 諸縁に無いもの、  
 それが縁より如何様に生じようか。 11

仮に、それ(結果)は無いとしても、  
 それらの縁より生じるとなれば、  
 縁ではないものよりも、  
 何故生じるとならぬのか。 12

仮に、それは無いとしても、  
 それらの縁より生じるならば、  
 縁ではないものよりも、果は  
 何故かといえば、生じない。(仏)

果が縁の本性であるならば、  
諸縁は自らの本性ではない。  
自らの事物でないものより、如何なる果があるか。  
それが、如何様に縁の本性となろうか。 13

それ故に縁の本性ではない。  
縁ではない本性の果は、  
有るのではない。果が無いのであれば、  
縁ではない、縁であると、何処でなろうか。 14

「縁を考察する」という第一章である。

※ (仏) は、『根本中論』チョコロ訳 (『ブッダパーリタ』に引用された旧訳) で、パツァブ訳 (新訳) と異なる記述を示す。

果は縁より起こったのである。  
諸縁は自らより起こったのではない。  
自生起ではないものより、如何なる果が  
あるか。それは、如何様に縁より起こっ  
たのか。(仏)

それ故に縁の本性ではない。  
縁でないものより起こった果は、  
有るのではない。果が無いのであれば、  
縁ではない、縁であると、何処でなろう  
か。(仏)

DECHEN 訳